

成人脊髄損傷者の再就労と就労継続に 影響を及ぼす因子

Meade MA, et al : The influence of secondary conditions on job acquisition and retention in adults with spinal cord injury. *Arch Phys Med Rehabil* 92 : 425-432, 2011

Key Words : 脊髄損傷, 再就労, 就労継続,
二次的合併症

〔目的〕成人脊髄損傷者の二次的合併症, 再入院, ナーシングホーム入所と再就労, 就労継続との関連について検討した。〔対象・方法〕研究は多施設縦断的データから後方視的に分析した。対象は, 米国脊髄損傷モデルシステム (SCIMS) に登録された症例のうち, 経過観察中に未就労であった群 ($n=9,501$) と経過観察時に就労していた群 ($n=5,150$) とした。評価は新たに再就労できた (受傷後 1 年毎の調査で未就労から就労に変わった) 者と就労継続できた (受傷後 1 年毎の調査の間に就労を維持できた) 者とした。〔結果〕二次的合併症がどのように再就労に影響したかは不連続時間危険モデルにより評価し, 患者背景や受傷の特徴, 過去 1 年間の再入院歴が再就労に影響を及ぼす因子であった。就労継続は階層性線形回帰分析により評価し, 再入院や褥瘡の存在が就労継続に影響を及ぼす因子であった。また, 過去の評価で存在した二次的合併症は現時点でそれがコントロールされていれば影響は認めなかった。〔結論〕成人脊髄損傷者の再就労と就労継続には, 二次的合併症による再入院が負の要因であることがわかった。したがって, 二次的合併症による再入院を減少させる介入が脊髄損傷者の就労に有益であることが証明された。(横浜市立大学 菊地 尚久)

慢性期脳外傷患者に対する居住地域への 再統合プログラムの前向き検討

Geurtsen GJ, et al : A prospective study to evaluate a residential community reintegration program for patients with chronic acquired brain injury. *Arch Phys Med Rehabil* 92 : 696-704, 2011

Key Words : 脳外傷, 慢性期, 地域生活, 参加

〔目的〕慢性期脳外傷患者および社会参加に心理的障壁をもつ患者に対する自立生活, 社会参加, 感情, QOL に対する居住地域への再統合プログラムの効果を検討した。〔対象・方法〕3 か月間での治療効果, およそ

の後 1 年間の経過観察を前向きコホート研究により施行した。対象は, 脳外傷専門のリハビリテーションセンターに通院する脳外傷患者 70 名で, 平均年齢は 25.1 歳, 受傷後平均経過期間は 5.2 年であった。リハビリテーションプログラムには屋内生活, 労働, 余暇, 社会的交流の向上を目指した包括的地域治療プログラムを用い, 評価尺度には CIQ, 労働序列評価, 生活状況, 就学状況, 労働状況, 労働時間, うつ病評価, Euro QOL, WHOQOL-BREF, GAF を用いた。〔結果〕すべての評価で有意な治療効果を認め, 治療待機期間中の自然回復による影響はなかった。帰結に対する影響力は CIQ, 労働序列評価, 労働時間, GAF で大きく, QOL の感情に対する項目で中等度, WHOQOL-BREF で小さかった。生活自立は治療前の 25.4% から治療後は 72.4% に改善し, 65.4% は経過観察時にも治療効果が持続した。〔結論〕慢性期脳外傷患者および社会参加に心理的障壁をもつ患者に対する居住地域への再統合プログラムは, 自立生活, 社会参加, 感情, QOL に効果を認めることが証明された。

(横浜市立大学 菊地 尚久)

小児期に急性リンパ性白血病であった成人生存者の 筋力と骨密度の関連

Joyce ED, et al : Association of muscle strength and bone mineral density in adult survivors of childhood acute lymphoblastic leukemia. *Arch Phys Med Rehabil* 92 : 873-879, 2011

Key Words : 骨密度, 筋力

〔目的〕急性リンパ性白血病患者では, 疾患と治療により, 骨密度と筋力の低下のリスクが高い。小児期に急性リンパ性白血病であった成人生存者の筋力と骨密度の関連を検討した。〔方法〕研究デザインは横断研究である。対象は, 小児研究病院で急性リンパ性白血病の治療を受けた成人生存者 493 人 (女性 261 人, 男性 232 人) で, 年齢は 20.4~49.8 歳 (中央値 35.7) であった。罹患期間は 12.7~46.5 年 (中央値 27.2) であった。四肢の骨密度は DEXA で評価した。四肢の筋力は握力と大腿四頭筋筋力を評価した。〔結果〕診断時年齢, 性別, 罹病期間, 身長, 体重, 骨粗鬆症の薬剤使用, 全脳照射, グルココルチコイドの使用量で, 調整後も下肢の骨密度と筋力に有意な相関を認めた ($R^2=0.33\sim0.40$)。上肢ではより強い相関を認めた (左

$R^2=0.558$, 右 $R^2=0.560$). [結論] 小児期に急性リンパ性白血病であった成人生存者の筋力は, 四肢の骨密度と関連していた. 筋力増強訓練で骨の健康状態が改善する可能性がある. (横浜市立大学 若林 秀隆)

Alzheimer 病の神経精神医学的症状に対する 認知刺激療法—無作為化比較試験

Y-X Niu, et al: Cognitive stimulation therapy in the treatment of neuropsychiatric symptoms in Alzheimer's disease: a randomized controlled trial. *Clin Rehabil* 24: 1102-1111, 2010

Key Words: Alzheimer 病, 認知刺激療法

[目的] 本研究は, 神経精神医学的な検査である 10 項目の Neuropsychiatric Inventory (NI) での評価と認知刺激療法 (CST) を組み合わせた初の無作為化比較試験である. [方法] 北京市の陸軍療養所にいる Alzheimer 病と診断された 32 人の患者を対象とし, CST 介入群 16 人, コントロール群 16 人に無作為に割り付けた. 介入前と CST 介入後に, MMSE と NI を用いて評価した. CST は, 1 回あたり 45 分間の訓練を週 2 回, 10 週間行った. CST の内容は, 見当識の確認, 言葉の流暢性を高める訓練, 重なり合う図形を確認する訓練, 写真を用いてエピソード記憶を引き出す訓練の 4 つとした. [結果] CST 介入群ではコントロール群と比較し, MMSE と NI の得点で有意に改善を示した. NI では, うつ, 無気力の項目で改善していた. [結論] 本研究は, 認知刺激療法が神経精神医学的障害を伴う Alzheimer 病患者に有用であることを示した.

(東北大学肢体不自由学分野 森 隆行)

心臓リハビリテーションにリラクゼーションセラピー を付加した場合の精神心理機能, 血行力学的機能, 入院に及ぼす影響

Neves A, et al: The effect of cardiac rehabilitation with relaxation therapy on psychological, hemodynamic, and hospital admission outcome variables. *J Cardiopulm Rehabil Prev* 29: 304-309, 2009

Key Words: リラクゼーションセラピー, 冠動脈疾患,
心臓リハビリテーション, 精神心理機能

冠動脈疾患患者の心臓リハビリテーションプログラムにリラクゼーションセラピー (RT) を付加した場合の精神心理機能, 血行力学的因子, 入院に及ぼす影響

を検討した. 81 名の冠動脈疾患患者をランダムに, 通常的心臓リハビリテーション群 (通常群) と心臓リハビリテーション群+RT 群 (RT 付加群) に分け, 12 週間のプログラム実施前後のストレス, 血圧, 心拍数, rate pressure product (RPP), 血中総コレステロール, BMI, 喫煙状況, 身体活動を測定した. さらに, その後に 2 年間フォローし, 心疾患関連入院の回数も比較検討した. 心臓リハビリテーションプログラムにより, 通常群と RT 付加群ともに心ストレスは低下したが, 低下の程度は RT 付加群で大きかった ($p<0.0001$). RT 付加群では, 血圧, 心拍数, RPP は有意に低下したが ($p<0.0001$), 通常群では変化を認めなかった. また, 血中総コレステロール, BMI, 喫煙状況, 身体活動は両群で同様に改善した. 一方, 2 年間の心疾患関連入院の回数に関しては, 血圧, 心拍数, 血中総コレステロール, BMI, 喫煙状況, 身体活動を標準化した後に比較してみると, 両群間で差異を認めなかった. 以上の結果より, リラクゼーションセラピーは心臓リハビリテーション患者の精神心理的なストレスや血行力学的な機能を改善する可能性があることが示唆された.

(東北大学内部障害学分野 上月 正博)

前方へのリーチの成績における加齢に関係する変化

Lin SI, et al: Age-related changes in the performance of forward reach. *Gait Posture* 33: 18-22, 2011

Key Words: 動的バランス, 前方リーチ, 加齢, 運動学

加齢により, リーチ能力の減退と動作パターンの変化が起こるかどうかを明らかにすることを目的に, 33 名の若年成人および 31 名の高齢者を対象に, 動作分析システムを使い, リーチの距離, 質量中心の偏位, 第 2 趾を超えて前方に移動する COM の距離 (CON-toe) を計測した. 動作パターンは股関節, 足関節およびそれらの複合戦略に分類された. 高齢者では最初の COM の位置が有意に前方に偏位しており, その偏位が小さく, 股関節屈曲がより大きいものの, リーチの距離と COM-toe は若年成人と同等であることがわかった. 戦略の分布はグループ間で有意に異なっていた. 加齢に伴い動作パターンは変化するが, 安定性の限界に近づく能力は減退しないことが示唆された. 高齢者に対するバランス訓練には, 非典型的な動作パターンの教育が含まれるべきかも知れない.

(国立長寿医療研究センター 近藤 和泉)